

発表題目 ストーリーはどのような存在者なのか

高田敦史 (Takada Atsushi)

所属 なし

物語論では、物語[narrative]とストーリー[story]の区別は多くの論者によって採用されている。物語はストーリーを語る表象(文章にかぎらず映像や画像なども含む)を指し、ストーリーは物語が語る内容を指す。「ストーリー」のこの用法は日常語で「小説のストーリー」や「映画のストーリー」と言う場合の「ストーリー」にほぼ対応している。例えば「走れメロス」のストーリーには、メロスの妹の結婚式やメロスの走りやメロスの到着などといった出来事が含まれる。本稿は、この意味でのストーリーがどのような存在者であるかについての哲学的な研究である。

物語とストーリーの区別は、しばしば用いられるものでありつつも、十分な検討を経ないまま使用されている。私たちは、ストーリーの同一性基準はもちろん、ストーリーが何であるのかすらよく知らない。本稿の目指す目標のひとつは、物語の内容という観念にきちんとした意味を与えることである。本稿は、Smuts[2009]の提示したジレンマに解決を与え、ストーリーが何であるのかを議論する。

また、もうひとつの関心は倫理学にある。物語としての人生というテーマは近年盛んに議論されている。ところが、人生がいかなる意味で物語と言えるのか十分検討されているとは言えない。人生は表象ではないのだから、人生そのものは物語ではなくストーリーにあたるだろう。ところが、私たちがストーリーとは何かをよく知らないことによって、この議論は混乱しがちである。この種の議論に手がかりを与えることも目的のひとつである。本発表ではまず、物語、ストーリー、出来事という対象について特徴づける。本稿の見解によれば、ストーリーは物語によって表象された出来事の複合体である。

さらに、ストーリーの移植、つまり同じストーリーが様々なメディアの物語によって語り直されることを検討することで、ストーリーの同一性について議論する。一般に同じストーリーを語る物語であっても、それぞれディテールに違いがあるため、ストーリーが同じであるとは何が同一であることなのかを検討されなければならない。私はここで、ストーリーはタイプであるという見解を批判する。ストーリーをタイプとして捉えることは、貴種流離譚やシンデレラストoryといったストーリー類型とストーリーの区別を曖昧にってしまう。また、物語の多くは個別的な事柄を述べるため、ストーリータイプに対応するような物語の内容を想定することは難しい。

本発表ではストーリー全体を一つの出来事として考えることができ、ストーリーは出来事

の同一性を持つという見解を擁護する。特にフィクションの物語の場合、ストーリーの同一性はフィクションの出来事の同一性であり、ストーリーの同一性自体がフィクショナルオペレーター的作用域の中に入る。これによって私たちは、ストーリーの同一性が厳密な同一性でありながらも、多様な語られ方を許し、関心に相対的なあり方をすることを認められる。

また時間が許せば、ストーリーが物語に表出された特定の評価的態度から独立していることを議論したい。私たちは、ハッピーエンドや悲劇といった価値付けを通じて物語を受容するが、ストーリーは特定の価値付けからは独立している。優れた演出家が喜劇を悲劇として語り直すことができるように、優れた批評家が喜劇を悲劇として読み解くことができるように、同じストーリーを異なる評価態度のもとで再解釈することができる。

参考文献

Smuts, Aaron. 2009. "Story Identity and Story Type." *Journal of Aesthetics and Art Criticism* 67 (1): 5-14.